

イスラームの生き方



目次

第1章

道德の意義

第2章

イスラームの道德の基礎＝信仰

1. 安定した人生
2. 唯一神の律法の無限の知恵
3. 人間の性格
4. 対人関係
5. 社会的責任
 - a. 両親
 - b. 夫婦および子供
 - c. 近親者
 - d. 隣人
 - e. 孤児と未亡人
 - f. 困窮者
 - g. ムスリム同胞
 - h. 人類同胞
 - i. 動物
6. 経済的諸問題
7. 行政上の諸問題
8. ジハード＝アッラーの道での努力
9. 結論

第1章 道德の意義

法律が社会の安全を護るルールであるのに対して、道德は人間の在り方に関する正邪の基準といえます。そこでは、行為の善悪を人間性の完成に照らして把えるわけですから、その基準が社会一般に承認されたものであっても、法律のような外面的な強制力は持たず、あくまでも個人の内面に係わる問題です。

とはいえ、個人が過去・現在・未来を通じて独自に存在することはあり得ないはずですから、個人の内面とはいっても、そこには他人の存在が大きく係わってきます。当然、他人の反応に照らして自らの在り方を確認していく作業が求められます。

地球が広く、コミュニケーションの手段が限定されていた時代は、地域社会での共通の価値観は得やすかったのでしょう。同じものを食べ、同じ言葉を使い、同じ景色を眺め、同じように生きていたのですから、話さずとも判る前程や不文律があり、共通の道德観が存在しました。変革はあっても、いわばコップの中の嵐にすぎず、全体の枠組を破壊するまでには至らなかったのです。

おそらく最初のころから、人間は環境の支配を夢みていたのですが、潜在能力の発現に応じて、その希望は叶えられていきました。あらゆる敵と闘い、非凡な能力を駆使してこれを屈服せしめ、生存を確保し、大地に満ち溢れました。

しかし、次第に種の保存本能は薄れ、個の豊かさを追求しはじめ、富や宝を追って血眼となって大地を賭けめぐるようになりました。全体の明日を考えることを止め、今日の富を追いました。それはいつからのことだったのでしょうか。その兆しが見えたときから、他人は敵となりました。個人は隣人を、集団は他の集団を、国家は他の国家を敵とし、競争相手として、限定された富を奪い合うようになりました。そして人間の思考は暴走し、共食い闘争に奉仕してきたのです。地球は狭くなり、隔離された地域社会は存在できなくなり、前程や不文律や道德は砕け散りました。その代わりに、不信と不安が支配しています。一見平和や安穩があるように見えても、それは力の均衡によってもたらされたものです。あえていえば、恐怖のバランス、それが今日の世界かも知れません。愛や共感を基盤とした社会ではなく、法律の強制力だけで必死に秩序を保とうとしている現状です。不信や不安に揺れ動く人間存在を、単なる力関係で押さえ込もうというのですから、絶望的なあがきにすぎません。

このような不信と不安から人間を救うためには、人類共通の価値観を持たねばなりません。それは、現在偏重主義と決別し、人類の未来に思考を向けなければ得られないでしょう。それも、来年や再来年、10年や20年後の未来ではなく、百年先、千年先の人類まで想定したものであるべきでしょう。

言語や食生活、皮膚の色、民族や国家、宗教やイデオロギー、ともすれば違いばかりが強調される今日、人類共通の価値を求めることは、抽象概念としては可能であっても、実際感覚としては容易ではありません。それは、時間の速度に対する情報の密度が濃くなればなるほど困難になっていきます。現在という瞬間の重みが増すからです。そして時間の長さや空間の広さは人間の無意識の部分で合致していて、瞬間を考えると、個を考えると連動するからです。

間違いが強調され、不信と不安が増幅される、現在偏重という牢獄から脱けて未来を考えると、個は初めて種の共感を得られるものと思います。そのとき初めて、人間存在の意義について考えられるのです。

単に世界平和や思いやりを説いても、これは空念仏にすぎません。生命の尊貴を説いても、なぜという疑問が残ります。なぜ人間が存在しなければならないのか、という質問です。これに答えられなければ、人間としての価値観や道徳は存在し得ません。過去の道徳が、形式のみの絵に書いたモチになってしまったのは、現代人の論理に対して、納得のいく答えが出なかったからです。神を持ち出しても、その神が宇宙のどこかに居る人格神ならば、納得できるわけもありません。その彼(または彼女)を愛し求めるにせよ、畏怖して遠ざけるにせよ、自分とは時空間的に離れた場所に置いてしまうからです。このような観念を抱くから、神の否定や、盲信に陥るのです。「信仰とは、信じ難きを信じることなり」というのは、西欧思想のため息でしょう。

イスラームの神は、そのような架空の存在ではありません。それは、宇宙を成立させた根本の真実であり、秩序を支える根本の力、あるいは意志なのです。物質の究極の「単一不可分」の要素とされたアトムの延長にある物質のみならず、光やエネルギー、重力や時間や空間、人間の思考までに共通する「単一不可分」の根源(アラビア語のアハド＝神の別名)なのです。この神を否定することは、自らの存在を否定することと同様であり、この神に返逆することは、自らの実在に返逆することなのです。人間が愛し、崇め求めるべき唯一の対象は神であり、それは敵のように恐れたりする対象ではありません。神を畏れるということは、神を大切にすることです。

この神を意識し、大切にし、崇拝することによって、人間は浄化され、実存は確立され、人間完

成への道が開けるのです。ここから現出した人間の道德こそ、現代を救い、世界平和をもたらすものでしょう。

この根源からの言葉を伝えたのが預言者達であり、その最後がムハンマドです。彼は神の言葉クルアーンを伝え、それに基づいた生き方を示しました。ですからイスラームは、道德や価値判断の基準を聖クルアーンと預言者のスンナ(言行)に求めるのです。

この書の第一章において、私は「神」という言葉を使いましたが、アラビア語の「アッラー」は唯一神、あるいは人間が崇拝すべき唯一の対象という意味です。神という日本語、あるいはゴッドという英語には、このイスラームの説く「根本意志」または「根本真実」という概念には合致しない解釈が付きまとうようです。そこで第2章以降は、アッラーに統一いたしたいと思います。



第2章 イスラームの道德の基盤＝信仰

イスラームには、信仰(イマーン)と善行(サーリハート)に基づいた人生の歩み方が示されています。

時間にかけて(誓う)、本当に人間は喪失の中にいる。

信仰して善行に勤しみ、互いに真理を勧め合い、また忍耐を勧め合う者たちの外は。(聖クルアーン 第103章1-3節)

信仰とは、アッラーの存在と預言者ムハンマドの真実を信ずることだけではありません。信念を実行に移し、アッラーへの、あるいは人々への義務を遂行することが重要なのです。むろん、創造主であり支配者であられるアッラーへの義務が他のすべてに優先すべきことはいうまでもありません。

言ってやるがいい。

「あなたがたの父、子、兄弟、あなたがたの妻、近親、

あなたがたの手に入れた財産、

あなたがたが不景気になることを恐れる商売、

意にかなった住まいが、

アッラーと使徒とかれの道のために奮闘努力するよりも

あなたがたにとり好ましいならば、

アッラーが命令を下されるまで待て。

アッラーは掟に背いた民を導かれない。」

(聖クルアーン 第9章 24 節)

アッラーへの信仰と信頼は、信者の意志と言行によって表現されます。信仰を言明し、感謝と謙遜と愛を持ってアッラーを想い、意図を純粋なものとし、そしてアッラーの命令とみ使いのスンナを実践し、他人に教えることです。

あなたがた信仰する者よ、アッラーとその使徒に従え。

(聖クルアーン 第8章 1 および 20 節)

アッラーへの帰依とは個人的な善行に限定されるものではなく、個人的、社会的、経済的、国際的など、あらゆる面にわたります。

個々の信者は、そして全イスラーム社会は、この世にアッラーの道徳律を打ち立てるための努力を義務として負わされています。聖クルアーンによると、現世は試練の場にすぎず、死後の生命こそ人間の終着点なのです。

富と子女はこの世の生活の装飾である。

だが永遠に残る善行こそは、主の御許では報奨において最も優れ、

また希望(の基礎)としても最も優れたものである。

(聖クルアーン 第 18 章 46 節)

ムスリム(イスラーム教徒)は、現世での行為は全て審判の日に清算されることを信じています。ですから現世での生活は次の永遠なる生命への導入部分として重要なのです。鳥が陽光や他の条件を独自の時空感覚に照らして帰巢の方角を判断するように、現世での人間も根源を意識し、方象に照らして確認し、アッラーを求め、アッラーに仕え、その道に適した善行を行なうのでなければ、帰り着くところとはんでもない場所になってしまうでしょう。

(善行を積んだ魂に言われるであろう。)おお、安心、大悟している魂よ、あなたの主に返れ、歓喜し御満悦にあずかって。

あなたは、わがしもべの中に入れ。

あなたは、わが樂園に入れ。

(聖クルアーン 第 89 章 27 — 30 節)

一方、来世を信じず、現世に没頭するあまり未来のことを考えぬ者は、現世での成功と喜びを最終目的としているのです。

本当にわれとの会見を期待しない者、また現世の生活に満足してこれに安心している者、そしてわれの印を疎かにする者、これらの者の住まいは、その(悪い)行ないのために地獄である。

(聖クルアーン 第 10 章 7 — 8 節)

信者の特質の一つは、謙遜と感謝の心です。アッラーによって創造された人間は、その生存か

ら生活の細部にいたるまで、あらゆる面でアッラーの無限の慈悲を受けています。そのような広大なお恵みに対して感謝の目を向けるのは人間として当然の義務でありましょう。その気持ちが、アッラーをたたえる言葉及び礼拝に発現されるのは当然のことではありますが、そこにとどまることなく、アッラーからの賜わりもの一富、知識、才能、成果などを他人と分かち合うことが重要なのです。

これとは正反対の態度－アッラーの恩恵に対する忘却や、学識、富、地位、家系、人種、民族への過度の誇りなど－は、アッラーの絶対的な力や慈悲に対し、その被造物である人間の立場に対する理解の欠如であり、信仰のなさを示しています。

だが信仰して善い行ないに励む者には、かれは十分の報奨を与え、

なおその恩恵を増して下さる。

だが軽んじて高慢な者には、かれは懲罰を科され、

アッラーの外にはどんな守護も援助も見いだすことは出来ない。

(聖クルアーン 第4章 173 節)

もしわれが、人間に親しく慈悲を施して味わしめ、

その後それをかれらから取り上げれば、きっと絶望して不信心になる。

だが災いに見舞われた後われがもし恩恵を味わしめると、

かれは「不幸はわたしから去ってしまった。」と言って必ず狂喜して自慢する。

耐え忍んで善行をなす者だけはそうではない。

これらの者には、(罪の)赦しと偉大な報奨がある。

(聖クルアーン 第11章 9－11 節)

1. 安定した人生

クルアーンでは、人間は全てムスリムとしてフィトラ(生得)を礎にして生まれてくるものとされています。フィトラは実存の根底にある創造の大方針に従うことで、それを好む姿勢であり、また根源を求める無意識の衝動ともいえます。その心は、悪に対しては良心の声として、善に対しては行動をうながす囁きとして常に訴えかけてきますが、瞬間に留り、表面的な出来事に一喜一憂する心は、時としてその声に耳を閉ざしてしまいます。心の葛藤は意識の参加を得ぬまま、幕の背後で行なわれます。根源や未来に対して閉ざされた心は刹那的な悦楽に酔い、一時的な安堵を得るかも知れません。しかしその状態は持続せず、瞬間から瞬間へ、点から点へと飛び移り、新しい変化を求め、新しい悦びや安堵感を追いまわすことになります。表面的な変化を追い続けるのですから、いつかは疲れ果ててしまいます。幕の背後での暗闘はそのとき表面化し、意識を襲い、人間の心を大きく揺さぶるのです。そこにいくつかの真剣な悩みが加われば、ストレスが生じ、場合によっては人格が崩壊し、あるいは人生からの逃避を試みてしまうかも知れません。

このフィトラを肯定し、常に新鮮に保ち続け、聞く耳を持つことで、暗部での闘いは消滅します。心の基部と同調した意識を持つことですから、葛藤はなくなります。根源を考えるのですから、表面的な出来事に振りまわされることもなく、ストレスも逃避もなく、持続する人生の喜びが得られます。フィトラを大切にすることで安定した心が得られ、本来の人間性が発現され、巨大な原動力を持って人間完成の大道を歩むことが可能となります。

それであなたはあなたの顔を純正な教えに、しっかり向けなさい。

アッラーが人間に定められたフィトラに基いて。

(聖クルアーン 第 30 章 30 節)

すなわち、アッラーが唯一であることを信じ、善行に近づくのは人間の本質なのです。

本当にわれは、人間を最も美しい姿に創った。

(聖クルアーン 第 95 章 4 節)

この点でイスラームの人間観は、魂に「原罪」の重荷を負わせたり、肉体的欲求及び本能的欲望が精神的進歩を阻害すると見る他の宗教とは全く違うのです。

イスラームは人間の人格を分離不能の統合的なものと見ており、全資質の合計がすなわち人間であるとしています。論議のため、あるいは何かを強調するため、人間の精神、知能、情緒、生物学的な面その他を個別的に取り上げることは可能ですが、實際上その一つ一つは互いに密接な関連を持ち、人格の内に融合されているのです。

このようにイスラームは宗教と日常、神聖なものと世俗的なもの、アッラーを意識した行為とそれ以外の行為などの間に区分や二重性を認めておりません。人間のあらゆる行為はそのまま人生の一部であり、それらは最後に決算される得点や失点になります。聖クルアーンでは礼拝、断食、喜捨、巡礼などアッラーへの崇拝の行為が定められていますが、それらの行為は信者に肉体、感情、知性、社会及び物質的な面で多くの恩恵をもたらすことにつながります。

イスラームでは現世的な事柄—たとえば商業、司法行政、金の貸し借り、結婚と離婚、飲食など—について一定の法令を定めていますが、そこには精神面が十分考慮されています。

アッラーを意識した真に安定した人生とは、人間存在の様々な面において平衡状態にあり、一つの面を極端に抑え他の面を強調することではありません。礼拝、断食、聖クルアーンの朗読などの敬虔な行為は信者の生活における基本的で重要なものでありますが、同時に人生における他の面とも平衡が取れていなければなりません。そしてこれらすべての面でアッラーを想い、その意志に沿うように努力すべきなのです。

ムスリムは人間の自然な欲望を捨て去ることを要求されてはいません。ただ、あらゆる欲望と好みを定められた範囲内にて求めることを期待されているだけです。

イスラームには、牧師のような特殊階級の人しか行なえないような神聖な儀式など存在しませんので、信者の精神的活動を統轄する聖職者階級も存在しません。個人はアッラーと直結しており、各自がアッラーの定めた制限を越えぬよう十分注意すべきなのです。

また、あなたがたは一団となり、(人びとを)善いことに招き、

公正なことを命じ、邪悪なことを禁じるようにしなさい。

これらは成功する者である。

(聖クルアーン 第3章 104 節)

この実的な意義は、信者がアッラーの命じたこと、禁じたことを学んでそれらを守り、そのことを他人に教え、地上にアッラーの法律を打ち立てるために努力すべきであるという勧告にあるのです。

聖クルアーンでは、人びとが理性と理解をもってアッラーに近づき、人生を生きることが要求されています。他の人びとの行為をただ「みんながやっているのだから」との理由で無分別にまねることは信者に許されていないのです。

また人間も鳥獣家畜も、異色とりどりである。アッラーのしもべの中で知識のある者だけがかれを畏れる。本当にアッラーは偉力ならびなく寛容であられる。

(聖クルアーン 第35章 28 節)

ここで言っている「畏れ」とは敵に対する恐れというような意味ではありません。譬えていえば、水や空気がなくなることへのおそれであり、生命の電源から切り離されてしまうおそれでもあります。それはアッラーを愛する、大切にするという意味であり、それを一段と強めた言い方なのです。その価値が認識できる者は知識ある者のみであるといい、知識を得ることの大切さを説いています。この知識はもちろん、単なる平板な表面的なものではなく、人生百般に応用が利く、根源を指向する奥深い知識を指しています。

また、預言者ムハンマド(彼の上に祝福と平安あれ)は次のように言っています。

「知識を求めることは、男女を問わず、全ムスリムの義務である」

その意味は、もし物事を理解しようとせず、深く考えもしないなら、たとえ誠実さがあつたとしてもそれだけでは不十分だということなのです。誠実さは理解力を伴わなくては完全とは言えません。

2. 唯一神の律法の無限の知恵

われわれムスリムは、アッラーの律法が勝手な気まぐれなどではなく、また圧制的な実行不可能なものでもないことをよく知っています。無限の知恵と慈愛に満ちたアッラーは、人間の肉体と精神の両面の必要に合わせて道徳律を定めたのであり、それは他のすべてを支配するアッラーの「自然の法則」と共に終末まで不変のものです。

アッラーこそ人間のすべてを知っているのですから、その法律はどの時代にもあてはまり、そして万人共通のものです。しかも、人間のあらゆる状態を考慮に入れて作られ、極端をさけ、中庸の道を示しているのです。この道徳の中のどの部分でも無視するなら、その社会には必然的にある種の腐敗が生じます。そのような例は過ぎ去った民族や文明の歴史の中でも見られますし、今日の腐敗の渦に取り巻かれている世界でも見る事が出来ます。

意識的に、あるいは気付くことがなくとも一つの分野において道徳原理に従うとき、そこには良い結果が明白にあらわれます。しかし同一の社会において、他の条項のいくつかが守られなければ、そこには悪い結果があらわれるのです。現代においても、十分な力を持つ人間や集団が道徳律を無視して社会に大きな害毒を流し、時には社会を破壊するまでに至るのは、多くの例が証明しているとおりです。現代の世界ではこのような多くの問題、すなわち階級的差別と相互憎悪、国家利益の追求と戦争、民族闘争、無制限の物質主義、犯罪の増加、家庭の破綻、放縱な性関係、麻薬やアルコールへの耽溺などが増幅され、個人と社会にいちじるしい弊害を及ぼしています。むろん、これらがアッラーの道徳律を尊重しないところからきていることは言うまでもありません。

逆に、アッラーの律法に従った生活は、外的環境のいかんを問わず、各人に平穏と調和と安定をもたらします。この律法を守ることによって、人びとは利己主義、食欲、高慢、不正、不正直などから脱し、尊敬、調和、協力の満ちた兄弟愛の社会へと移行して行くのです。「競争」より「協力」、「私欲」より「公益」、「支配」より「協議」などが社会、経済、政治におけるイスラームの指導原理なのです。

預言者ムハンマド(彼の上に祝福と平安あれ)と教友たちの生き方こそ、この理想的社会の実現であったのですが、それは世界史の中でもおそらく唯一のユニークな例証と思われます。とはいえ、今日においても、もし全ムスリムがアッラーの命じたことを忠実に実行するなら、そのような理想的社会を再建することは可能でしょう。

次に、イスラームの教えが個人の性格、対人関係、社会的責任、経済および行政上の問題、

アッラーへの帰依のための努力など、さまざまな面でどのように規制しているかを聖クルアーン及びスンナによって調べてみましょう。

3. 人間の性格

社会の質は構成する人びとによって定まりますから、まず最初に人間の性格をここにとり上げてみましょう。

イスラームの教えのなかで最も強調されているのは「アッラーを畏れる」ことですが、これはアラビア語の「タクワー」の大体の意味です。「タクワー」とはアッラーを意識し、根源への責任を自覚し、アッラーのお怒りをおそれる精神を示しています。そして、そのことがムスリムとしての特性であると聖クルアーンに記載されています。

人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、
種族と部族に分けた。

これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。

アッラーの御許で最も貴い者は、

あなたがたの中最も主を畏れる者である。

本当にアッラーは、全知にして凡ゆることに通暁なされる。

(聖クルアーン 第 49 章 13 節)

アッラーを畏れることは、人間に健全な良心を与えます。

信仰する者よ、もしあなたがたがアッラーを畏れるならば、

かれはあなたがたに識別を与え、

あなたがたの諸悪を消滅し赦して下される。

本当にアッラーは偉大な恩恵の主であられる。

(聖クルアーン 第8章 29節)

預言者は次のように言っています。

「もしアッラーを畏れる(大切にする)ため、信者の目から一滴の涙でも落ちるなら、アッラーは彼を地獄から遠ざけるであろう」

ハディース(預言者言行録)の中のこの言葉は、アッラーへの畏怖の念がいかに重大であるか、人びとの行動にどれほどの影響を与えるかを表しており、その要素がいかに小さくとも現世と来世にわたって極めて大きな相違をもたらすことを明らかにしています。

イスラームの教えの中で特に強調されているのは、謙遜、慎み、欲情の制御、正直、誠実、忍耐および着実さであります。約束と契約を完遂し、すべての信頼にこたえ、義務を果たし、債務を返済するようアッラーから命じられています。道徳行為の広い面にわたって説いている聖クルアーンのいくつかの章節をあげてみましょう。

よく耐え忍び、誠実で、敬虔に奉仕して、

(道のために賜物を)施し、

また暁に(罪の)赦しを祈る者たちである。

(聖クルアーン 第3章 17節)

…誠にアッラーは耐え忍ぶものを愛でられる。

(聖クルアーン 第3章 146節)

かれら(全部)が同様なのではない。
啓典の民の中にも正しい一団があつて、
夜の間アッラーの啓示を読誦し、また(主の御前に)サジダする。
かれらはアッラーと最後の日とを信じ、
正しいことを命じ、邪悪なことを禁じ、互いに善事に競う。
かれらは正しい者の類である。
かれらの行なう善事は、
一つとして(報奨を)拒否されることはないであろう。
アッラーは主を畏れる者を御存知であられる。
本当に信仰しない者の財宝もその子女も、
アッラーに対しては少しも役立たないであろう。
かれらは業火の住人である。永遠にその中に住む。
(聖クルアーン 第3章 133－136 節)

(ムハンマドよ)寛容を守り、道理にかなったことを勧め、
無知の者から遠ざかれ。
また悪魔からの中傷があなたを悩ました時は、
アッラーの加護を求めなさい。
本当にかれは全聴にして全知であられる。
本当に主を畏れる者は、悪魔がかれらを悩ますとき、
(アッラーを)念ずればたちどころに(真理に)眼が開くだろう。
だがかれら(悪魔)の兄弟たちは、
もっと深くかれらを誤りに引き込もうとして、決して手を緩めない。
(聖クルアーン 第7章 199－202 節)

朝な夕な、主の慈顔を求めてかれに祈る者と共に、

あなた自身を堅く守りなさい。

また現世の生活の栄華を望んで、

かれらからあなたの目をそらせてはならない。

またわれが、その心にわれを念じることをゆるがせにさせた者、

また私欲に従って、自分の事に、法を越えた者に付き従ってはならない。

(聖クルアーン 第 18 章 28 節)

あなたがたは、財産や生活などに就いて必ず試みにあう。

そしてあなたがた以前に啓典を下された者からも、

多神教徒からも、多くの悪口を聞かされるであろう。

だがあなたがたが耐え忍んで主を畏れるならば、

本当にそれは、物事を決断し成し遂げることになる。

(聖クルアーン 第 3 章 186 節)

「息子よ、礼拝の務めを守り、善を(人に)勧め悪を禁じ、

あなたに降りかかることを耐え忍べ。

本当にそれはアッラーが人に定められたこと。

他人に対して(高慢に)あなたの頬を背けてはならない。

また横柄に地上を歩いてはならない。

本当にアッラーは、自惚れの強い威張り屋を御好みになられない。

歩き振りを穏やかにし、声を低くしなさい。

本当に声の最も厭わしいのは、ロバの声である。」

(聖クルアーン 第 31 章 17－19 節)

本当にムスリムの男と女、信仰する男と女、献身的な男と女、

正直な男と女、堅忍な男と女、謙虚な男と女、施しをする男と女、

齋戒(断食)する男と女、貞節な男と女、アッラーを多く唱念する男と女、

これらの者のために、アッラーは罪を赦し、偉大な報奨を準備なされる。

(聖クルアーン 第 33 章 35 節)

嘘をもって真理を覆ったり、また(確かに)知っていながら、
真理を隠してはならない。

(聖クルアーン 第2章 42節)

いや本当にアッラーは、自分の約束を全うし、
自分の義務を果たす者を愛でられる。

(聖クルアーン 第3章 76節)

あなたがた信仰する者よ、約束を守りなさい。

(聖クルアーン 第5章 1節)

アッラーは、下品で有害な行為を禁じています。それらを控えることは私たちの義務であり、誘惑に導くであろう状況をも努めて避けるべきなのです。アッラーは次のように言っています。

私通(の危険)に近付いてはならない。

それは醜行である。憎むべき道である。

(聖クルアーン 第17章 32節)

結婚(の資金)が見つからない者は、
アッラーの恩恵により、富むまで自制しなさい。

またあなたがたの右手が持つ者の中、

(解放の証明)証書を求める者があって、

あなたがたがかれらの善良さを認めるならば、その証明を書きなさい。

なおアッラーがあなたがたに与えられた資財の一部を
かれらに与えなさい。

奴隷の娘たちが貞操を守るよう願うならば、

現世の果かない利得を求めて醜業を強制してはならない。

かの女らが仮令誰かに強制されたなら、

アッラーがやさしく罪を赦し、いたわって下さろう。

(聖クルアーン 第 24 章 33 節)

預言者ムハンマド(彼の上に祝福と平安あれ)は、次のように言っています。

「謙譲と信仰とは、共に存立するものである。一方が失われれば、他方も同時に消失する」

あなたがた信仰する者よ、

誠に酒と賭矢、偶像と占い矢は、忌み嫌われる悪魔の業である。

これを避けなさい。恐らくあなたがたは成功するであろう。

悪魔の望むところは、酒と賭矢によってあなたがたの間に敵意と憎悪を起こさせ、あなたがたがアッラーを念じ礼拝を捧げるのを妨げようとするものである。それでもあなたがたは慎まないのか。

(聖クルアーン 第 5 章 90－91 節)

このような、ムスリムのとるべき道徳的態度と行為を要約して、預言者ムハンマド(彼の上に祝福と平安あれ)は次のように言っています。

「主は私に 9 つの事を命じた。

私生活においても、公的な場でも、常にアッラーを意識すること。

怒れるときも喜びのときも、常に正しい話をする事。

貧富を問わず、常に中庸を歩むこと。

私から離れた者との友情を回復すること。

私を拒んだ者に与えること。

私を迫害した者を赦すこと。

私の沈黙は瞑想であり、私の視線は訓戒となり、

私はいつも正しい事のみを命じること。」

4. 対人関係

人びとの互いの関係に対するイスラームの教えを要約するには、アラビア語の「ヒルム」の一語で足りるでしょう。ヒルムとは「忍耐と親切と容赦」を合わせた意味です。

日常生活の中では必然的にあらゆる種類の人びととの関係が生じますが、人にはそれぞれ限界があり、弱点、過ち、判断の間違いなどはつきものです。ですから他人を批判したり、侮辱したり、愚弄し恥かしめたり、あるいは他人に対して偏狭な態度をとったりすることは傲慢のあらわれ以外のなにものでもありません。

順境においてもまた逆境にあっても、(主の贈物を施しに)使う者、
怒りを押えて人びとを寛容する者、
本当にアッラーは、善い行ないをなす者を愛でられる。
(聖クルアーン 第3章 134 節)

男は女の擁護者(家長)である。
それはアッラーが、一方を他よりも強くなされ、
かれらが自分の財産から(扶養するため)、経費を出すためである。
それで貞節な女は従順に、アッラーの守護の下に(夫の)不在中を守る。
あなたがたが、不忠実、不行跡の心配のある女たちには諭し、
それでもだめならこれを臥所に置き去りにし、
それでも効きめがなければこれを打て。
それで言うことを聞くようならば
かの女に対して(それ以上の)ことをしてはならない。
本当にアッラーは極めて高く偉大であられる。
(聖クルアーン 第4章 34 節)

親切な言葉と寛容とは、侮辱を伴う施しものに優る。
アッラーは富有にして慈悲深くあられる。
(聖クルアーン 第2章 263 節)

預言者(彼の上に祝福と平安あれ)は、召使いのあやまちは何度まで許すべきかとの質問に対して、「1日70回まで許しなさい。もし召使いの弱点を許容できなければ、彼を去らせなさい」と

答えています。

悪口を言わず、詮索せず、自分が言われたくないようなことを他人の背後で言わないことも寛容と親切の一部です。その人のための善意の意図がない限り、他人のことを秘密理に論議してはなりません。他人の失敗を知ったとき、それを隠してやるのが良いのです。人を恥かしめてはいけません。なぜならそこには、過ちに対する認識ではなく、感情を害した反抗的な態度が生じるからです。

他人の信仰の深さやまじめさを揶揄してはいけません。何らかの社会的行動が必要なとき以外は、他人の悪業や悪い出来事について話してはならないと命じられています。もちろん、宗教の品位を落したり愚弄する会話、または卑わいな会話に加わってはなりません。

信仰する者よ、或る者たちに外の者たちを嘲笑させてはならない。

それら(嘲笑された方)がかれらよりも優れているかも知れない。

女たちにも外の女たちを(嘲笑させては)ならない。

その女たちがかの女たちよりも、優れているかも知れない。

そして互いに中傷してはならない。

また綽名で、罵り合ってはならない。

信仰に入った後は、悪を暗示するような呼名はよくない。

それでも止めない者は不義の徒である。

信仰する者よ、邪推の多くを払え。

本当に邪推は、時には罪である。

無用の詮索をしたり、また互いに陰口してはならない。

死んだ兄弟の肉を、食べるのを誰が好もうか。

あなたがたはそれを忌み嫌うではないか。

アッラーを畏れなさい。

本当にアッラーは度々赦される方、慈悲深い方であられる。

人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、

種族と部族に分けた。

これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。

アッラーの御許で最も貴い者は、

あなたがたの中最も主を畏れる者である。

本当にアッラーは、全知にして凡ゆることに通曉なされる。

(聖クルアーン 第 49 章 11－13 節)

かれらの秘密の会議の多くは、無益なことである。

ただし施しや善行を勧め、あるいは人びとの間をとりなすのは別である。

アッラーの御喜びを求めてこれを行なう者には、

われはやがて、偉大な報奨を与えるであろう。

(聖クルアーン 第 4 章 114 節)

また、預言者ムハンマド(彼の上に祝福と平安あれ)は次のように言っています。

「ムスリムの誠実さの証は、自分に関係のないことに余計な注意を払わないことである。真のムスリムとは、その言動が他のムスリムにとって全く安心できる者である。」

5. 社会的責任

社会的な責任に関するイスラームの教えは、親切と思いやりに基づいています。ただ親切であれという訓戒は、特定の局面においては疎かにされやすいので、イスラームではさまざまな親切行為を強調し、さまざまな人間関係において権利と義務を明確にしています。

広範囲にわたる人間関係のなかで、私たちの第一の務めは自分の家族、つまり両親、夫婦および子供たちに対するものであり、次には他の親族、隣人、友人と知人、孤児と未亡人、困窮者、ムスリム同胞、全人類および動植物、資源、環境保存へと及びます。

a. 両親

イスラームの教えのなかで親に対する孝行は強く説かれており、それは信仰上重要な部分でもあります。

あなたの主は命じられる。

かれのほか何者をも崇拝してはならない。

また両親に孝行しなさい。

もし両親がまたそのどちらかが、あなたと一緒にいて老齢に達しても、かれらに「ちえっ」など荒い言葉を使わず、親切な言葉で話しなさい。そして敬愛の情を込め、両親に対し謙虚に翼を低く垂れ（優しく）て、「主よ、幼少の頃、わたしを愛育してくれたように、2人の上に御慈悲を御授け下さい。」と（折りを）言うがいい。
（聖クルアーン 第17章 23－24節）

一人の男が預言者（彼の上に祝福と平安あれ）のもとに来て、「アッラーの使徒よ、私が一番面倒をみなくてはならないのは誰でしょうか」とたずねると、預言者は「それはあなたの母である」と三度繰り返し、そして「その次は父親。そして近親者の順である。」と答えました。

b. 夫婦および子供

アッラーは、男に対して自分の妻と子に必需品を与え、家庭内に宗教的雰囲気を作り、妻と子の教育と幸福について責任を持つよう命じています。一方、女性は夫と子供たちの家庭および子供の教育について責任を負っています。

相互の愛と信頼、二人の間の秘密を保つこと、互いの弱点を許し合うこと、愛情と思いやり、そして相手に対する親切心などは夫と妻の双方に課せられています。子供は両親に対して協力的で、両親を尊敬し、従順でなくてはなりません。

男は女の擁護者（家長）である。

それはアッラーが、一方を他よりも強くなされ、

かれらが自分の財産から（扶養するため）経費を出すためである。

それで貞節な女は従順に、

アッラーの守護の下に(夫の)不在中を守る。…

(聖クルアーン 第4章 34 節)

…かの女らはあなたがたの衣であり、

あなたがたはまたかの女らの衣である。…

(聖クルアーン 第2章 187 節)

預言者ムハンマド(彼の上に祝福と平安あれ)は次のように言いました。

「信者の中で最も完全な信仰をもつ者は、最良の地位をもち、自分の家族に最も親切な者である」

c. 近親者

ムスリムが責任をもつ順序として次にくるのが近親者であり、アッラーは血縁関係について、次のように言っています。

近親者に、当然与えるべきものは与えなさい。

また貧者や旅人にも。

だが粗末に浪費してはならない。

(聖クルアーン 第17章 26 節)

かれらは、いかに施すべきか、あなたに問うであろう。言ってやるがいい。

「あなたがたが施してよいのは両親のため、

近親、孤児、貧者と旅路にある者のためである。

本当にアッラーはあなたがたの善行を、何でも深く知っておられる。」

(聖クルアーン 第2章 215 節)

d. 隣人

人間の性格に対しては、その隣人の評価こそ当を得ている場合が多いものです。隣人に対して親切であり、できるだけの援助を与えることはムスリムの義務であります。

ある人が預言者(彼の上に祝福と平安あれ)に、「アッラーの使徒よ、親切であったか否かはどうすればわかるのでしょうか」とたずねましたが、預言者(彼の上に祝福と平安あれ)は、「あなたの隣人が親切だったと言え、あなたは親切であった。もし隣人があなたを不親切であると言うなら、あなたは本当に不親切なのだ」と答えました。

また預言者は次のようにも言っています。

「そばにいる隣人が飢えているとき、自分だけ腹いっぱい食べる者は信者ではない。またその行為によって隣人に不安をもたらすなら、その者は信仰を持っていない」。

e. 孤児と未亡人

どの社会においても、孤児と未亡人は保護と物資の供給を必要としています。たとえ未亡人が夫の思い出に忠実でありたいと再婚を嫌った場合でも、それでも再婚した方がよいのです。預言者ムハンマド(彼の上に祝福と平安あれ)は、「未亡人と孤児のために尽力する者は、アッラーの道で努力する者である」と言っています。

また、孤児を引取って自分の子同様に育てるのは近親者の責務ですが、近親者がいない、もしくは何らかの理由で残された子供を引取る者がいない場合には、他のムスリムやイスラーム団体ができるかぎりの思いやりをもって養育することが義務とされています。

またかれらは孤児に関し、あなたに問うであろう。

言ってやるがいい。

「かれらのために、有利に取計らうのは善いことである。

もしかれらと親しく交わる時は、あなたがたは兄弟である。」

アッラーは、善意の者と悪事をなす者を知っておられる。

(聖クルアーン 第2章 220節)

預言者(彼の上に祝福と平安あれ)は、「近親の、あるいは他人の孤児を責任もって養育する者は、この私と共に天国に入るであろう」と言い、人さし指と中指を並べて見せました。

f. 困窮者

ザカート(喜捨)はイスラームの第三の柱であり、経済的余裕のあるムスリムすべてに課せられた義務です。

ザカート以外にも、聖クルアーンとハディースの中でサダカ(慈善)がくりかえし命じられています。これは困窮者を援助するためにできることをするのが、イスラームの重要で基本的な部分であることを強調しているのです。この教えを忠実に守っていた時代のイスラーム社会は大いに繁栄し、ザカート基金の分配に適当な困窮者がいなくて困ったことすらありました。

サダカは、物質的な援助か他の種類の供与かに関わらず、寛大で親切な気持で行なわなくてはならず、恥かしめを伴ったり、相手に負担を与えたりしてはいけません。

アッラーの道のために、自分の財産を施し、

その後かれらの施した相手に負担侮辱の念を起こさず、

また損なわない者、これらの者に対する報奨は、主の御許にある。

かれらには、恐れもなく憂いもないであろう。

親切な言葉と寛容とは、侮辱を伴う施しものに優る。

アッラーは富有にして慈悲深くあられる。

(聖クルアーン 第2章 262—263節)

信仰する者よ。

あなたがたの働いて得たよいものと、

われが大地からあなたがたのために生産したものを借しまず施せ。

悪いものを図って、施してはならない。

目をつむらずには、あなた(自身)さえ取れないようなものを。

アッラーは満ち足りておられる方、

讃美されるべき方であられることを知rinaさい。

(聖クルアーン 第2章 267 節)

あなたがたは施しをあらわにしても結構だが、

人目を避けて貧者に与えれば更によい。

それはあなたがたの罪悪(の汚れ)の一部を、払い清めるであろう。

アッラーはあなたがたの行なうことを熟知されておられる。

(聖クルアーン 第2章 271 節)

かれらを(正道に)導くことは、あなた(ムハンマド)の責任ではない。

アッラーは、御心に適う者を導かれる。

あなたがたが施す良いものは、みなあなたがた自身のためである。

あなたがたは、アッラーの御顔(御喜び)を願う外には施さない。

施した良いものは、完全にあなたがたに返されよう。

あなたがたは不当に遇せられることはないのである。

(聖クルアーン 第2章 272 節)

あなたがたは愛するものを(施しに)使わない限り、

信仰を全うし得ないであろう。

あなたがたが(施しに)使うどんなものでも、

アッラーは必ず御存知である。

(聖クルアーン 第3章 92 節)

また債務者がもし窮境にあるならば、そのめどのつくまで待て。

もしあなたがたが分っているならば、

(帳消しにして)喜捨することがあなたがたのために最もよい。

(聖クルアーン 第2章 280 節)

預言者(彼の上に祝福と平安あれ)は、こう言っています。

「二人の間の争いを公正に裁くのはサダカである。所有する動物で他人の荷物を運べば、それもサダカである。良い言葉も、礼拝に向う一步一步も、そして道路上の危険物をとりのぞくことも、やはりサダカである」。

預言者(彼の上に祝福と平安あれ)は、すべてのムスリムがサダカを行なうべきである、と言いましたが、何も持たぬ者はどうすべきかとの問いに対して「両手を使って働き、得た利益を使いなさい。」と答えました。

「それができない場合は？」

「困っている人、悲嘆にくれている人を助けなさい」

「それでもできないときは？」

「そのときは、善いことをしなさい」

「善いことができないときは？」

「そのときは、悪いことをしないように。それもサダカである。」

これら聖クルアーンの節とハディースによって、サダカの意味はきわめて広く、他人を益したり助けたりすることすべてが含まれることを理解できるのです。

g. ムスリム同胞

ムスリム同士の関係は、きわめて重要な問題です。というのは、世界中のムスリムがアッラーの教えを守り、主の喜びのため努力し、イスラームの目標に向かって助けあい、一つの共同体を形成しているからです。ムスリムはすべて兄弟姉妹であり、互いに家族の一員として親切と思いやりに満ちた態度で接しなくてはなりません。

信者たちは兄弟である。

(聖クルアーン 第 49 章 10 節)

あなたがたはアッラーの絆に皆でしっかりと縋り、分裂してはならない。

(聖クルアーン 第3章 103 節)

預言者ムハンマドは次のように述べています。

「全ムスリムは一つの身体のようなもので、目が痛めば全身が影響を受け、頭が痛めば、全身が影響を受ける」

「ムスリムは、他人に対して6つの良い行ないをしなくてはならない。すなわち、人に会ったら敬意を表して挨拶すること、招待に応じること、人がくしゃみをしたら「アッラーのご加護がありますように」と言うこと、病人を見舞うこと、葬儀に参列すること、そして自分の好むことを人にも施すことである」

「ムスリムは互いに兄弟であるから、他のムスリムを不当に扱ったり見捨てたりはしない。同胞を助ければ、アッラーが自分を助ける。兄弟の心配事を解決してやれば、審判の日にアッラーが自分の心配事を取り除いてくれる。ムスリムの秘密を隠せば、アッラーが審判の日に自分の秘密を隠してくれる」

h. 人類同胞

アッラーは、意志と行為によってのみ、人を評価します。出生、国籍、人種、金銭的成功、社会的地位などはアッラーにとって全く関係のないことなのです。私たちムスリムとしても、人間の作り出したこれらの差別や相違にとらわれることなく、公平と親切心ですべての人間に接するべきです。

人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、
種族と部族に分けた。

これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。

アッラーの御許で最も貴い者は、

あなたがたの中最も主を畏れる者である。

本当にアッラーは、全知にして凡ゆることに通曉なされる。

(聖クルアーン 第 49 章 13 節)

i. 動物

親切と良い扱いは、人間だけでなく動物にもさしのべなくてはなりません。預言者(彼に平安あれ)は動物を飢えさせたり、虐待したり、あるいは傷つけたりすることを固く禁じています。もちろんこのことは、できるだけ苦痛を与えずに食用のため屠殺する動物、または人間に有害な蛇、サソリ、蠅、蚊その他を殺してはいけないとのことではありません。

地上の生きとし生けるものも、双翼で飛ぶ鳥も、

あなたがたのように共同体の同類でないものはない。

(聖クルアーン 第 6 章 38 節)

預言者(彼の上に祝福と平安あれ)が教友たちと旅行中、一寸の間一人でよそに行きましたが、その間教友の一人が二匹の雛を連れた鳥を見つけ、その雛をつかまえてきました。親鳥はもちろん翼を拡げて怒り、後を追ってきました。その時預言者が帰ってきて、「子供を奪って彼女を苦しめたのは誰か。彼女に子供たちを返さない」と叱りました。

6. 経済的諸問題

イスラームでは、アッラーが万物の所有者であり、人間が使用あるいは享受している土地、穀物、森、大洋、天然資源その他のあらゆるものはアッラーの所有物であると教えています。アッラーの地上における代理者である人間は受託者にすぎず、実際には何も所有していません。そこでムスリムは、富や財産をアッラーからの賜わり物と見なし、アッラーの喜びを目的として使うのです。すなわち自分と家族のため、両親と親族のため、孤児、未亡人、貧困者の必要を満たすため、そしてアッラーの道で努力するために使用するのです。

人間の生計は、正直な労働あるいは生産的な投資によってたてるべきですが、そうして得たも

のはただ蓄財したり、見栄を張るために消費したり、あるいは贈賄その他不正の元となる事や他人を抑圧したり傷つけたりするために使ってはなりません。

同じ精神にもとづいて、地球の資源は人類全体へのアッラーの恵みですから、人類全体のために開発し、利用すべきです。一部の人びとだけのため、あるいは有害な用途にもちいてはならないのです。一人で使うより共同で、競争より協力して、これがイスラームの精神です。そのためにこそ、高利、賭博、富の貯めこみ、強欲、貪欲および浪費がアッラーの禁止事項にふくまれているのです。

あなたがたの間で、不法にあなたがたの財産を貪ってはならない。

またそれを贈って裁判官に近づき、他人の財産の一部を

不当であると知りながら貪ってはならない。

(聖クルアーン 第2章 188 節)

あなたがた信仰する者よ、

倍にしまたも倍にして、利子を貪ってはならない。

アッラーを畏れなさい。

そうすればあなたがたは成功するであろう。

(聖クルアーン 第3章 130 節)

信仰する者よ、

あなたがたの財産を、不正にあなたがたの間で浪費してはならない。

だがお互いの善意による商売上の場合には別である。

またあなたがた自身を、殺し(たり害し)てはならない。

誠にアッラーはあなたがたに慈悲深くあられる。

(聖クルアーン 第4章 29 節)

あなたの手を、自分の首に縛り付けてはならない。(注)

また限界を越え極端に手を開き、恥辱を被り困窮に陥ってはならない。

(聖クルアーン 第 17 章 29 節)

(注)物惜しみなことに対する熟語

…「有頂天になってはなりません。

本当にアッラーは思い上がっている者を御好みになられません。

アッラーがあなたに与えられたもので、来世の住まいを請い求め、

この世におけるあなたの(務むべき)部分を忘れてはなりません。

そしてアッラーがあなたに善いものを与えられているように、

あなたも善行をなし、

地上において悪事に励んではなりません。

本当にアッラーは悪事を行なう者を御好みになりません。」

(聖クルアーン 第 28 章 76－77 節)

商業活動においては、正直、確実さおよび公正な取引を行なうことがアッラーへの義務であります。相手をだまし、不良品であることを隠して売ったり、相手の無知を利用して不正な利益を貪るのはムスリムとして禁止されています。

ムハンマド(彼の上に祝福と平安あれ)が預言者としての資格を得る前から、マッカの人びとはかれをアル・アミーン(信頼できる人)と呼んでいました。商売上のかれの公正な態度は、雇用者であった未亡人ハディージャに深い感銘を与え、ずっと裕福で年上だったにもかかわらず、かの女はムハンマドに結婚を申し込みました。

…だがあなたがたが互いに信用している時、

信用された者には託されたことを(忠実に)果たさせ、

かれの主アッラーを畏れさせなさい。…

(聖クルアーン 第 2 章 283 節)

それからあなたがたが計量する時は、

(買い手のために)その量を十分にしなさい。

また正しい秤で計りなさい。

それは立派であり、その方が結果として最良になる。

(聖クルアーン 第 17 章 35 節)

あなたがた信仰する者よ、

あなたがたが期間を定めて貸借する時は、それを記録にとどめなさい。

あなたがたのことがらを公正な記録者に記録させる。

記録者は、アッラーが教えられたように記録し、

書くのを拒むことは出来ない。

それでかれに記録させなさい。

債務者に口述させなさい。

かれの主アッラーを畏れ、少しもそれを少なく言ってはならない。

もし債務者が精神的に欠けるか幼弱者であり、

または自ら口述できない場合は、後見人に公正に口述させなさい。

あなたがたの仲間から、2 名の証人をたてなさい。

2 名の男がいらない場合は、

証人としてあなたがたが認めた 1 名の男と 2 名の女をたてる。

もし女の 1 人が間違っても、他の女がかの女を正すことが出来よう。

証人は(証言のために)呼ばれた時、拒むことは出来ない。

事の大小に拘わらず、期限を定めた(取り決めは)

記録することを軽視してはならない。

それは、アッラーの御目には更に正しく、また正確な証拠となり、

疑いを避けるために最も妥当である。...

(聖クルアーン 第 2 章 282 節)

7. 行政上の諸問題

行政官と裁判官は、きわめて大きな責任を担っています。もしかれらがアッラーに対する義務

を自覚しないなら、圧力団体や自己の利益、あるいは偏見や好みに影響されて正義から離脱することも可能でしょう。

多少なりとも責任を持つ人間すべてに対して（それが一家の主であろうと一国の王であろうと）、正しく公正であれとアッラーは強く命じています。これは人間のアッラーに対する義務であり、国家利益の追求もこの務めを妨げてはなりません。

あなたがた信仰する者よ、

アッラーのために堅固に立つ者として、正義に基づいた証人であれ。

人びとを憎悪するあまり、あなたがたは（仲間にも敵にも）

正義に反してはならない。

正義を行ないなさい。それは最も篤信に近いのである。

アッラーを畏れなさい。

アッラーはあなたがたの行なうことを熟知なされる。

（聖クルアーン 第5章8節）

あなたがた信仰する者よ、

証言にあたってアッラーのため公正を堅持しなさい。

仮令あなたがた自身のため、または両親や近親のため（に不利な場合）でも、また富者でも、貧者であっても（公正であれ）。

アッラーは（あなたがたよりも）双方にもっと近いのである。

だから私欲に従って、（公正から）逸れてはならない。

あなたがたが仮令（証言を）曲げ、または背いても、

アッラーはあなたがたの行なうことを熟知なされる。

（聖クルアーン 第4章135節）

国民の福祉に関して統治者と政府の義務は、アッラーの律法に従い、正しく公正であることです。また国民としても、この律法に違反する命令でないかぎり、統治者や政府に従う義務があるのです。統治者や政府は国民の見解と要求を確かめるため、国民またはその代表と相談しなければなりません。

…互いに事を相談し合って行なう者…

(聖クルアーン 第42章 38節)

あなたがた信仰する者よ、アッラーに従いなさい、
また使徒とあなたがたの中の権能を持つ者に従え。
あなたがたは何事に就いても異論があれば、
アッラーと終末の日を信じるのなら、
これをアッラーと使徒に委ねなさい。
それは最も良い、最も妥当な決定である。
(聖クルアーン 第4章 59節)

預言者は次のように言っています。

「好むや否やにかかわらず、命令に従うのはムスリムの務めである。ただし、その命令がアッラーの道にそむくときは別であり、従ってはならない。」

8. ジハード＝アッラーの道での努力

ジハードは、アッラーの道のために奮闘努力するという意味のアラビア語「ジハード・フィー・サビーリッラー」を意味します。これにはイスラームの教えを人びとに伝え説明すること、悪と汚濁に反対すること、不正、社会的不平等、文盲、貧困、疫病その他の問題のために闘うこと、またそれらの個人や団体に力を貸すことも含まれています。

また、あなたがたは一団となり、(人びとを)善いことに招き、

公正なことを命じ、邪悪なことを禁じるようにしなさい。

これらは成功する者である。

(聖クルアーン 第3章 104 節)

あなたがたは、人類に遣わされた最良の共同体である。

あなたがたは正しいことを命じ、邪悪なことを禁じ、

アッラーを信奉する。

啓典の民も信仰するならば、かれらのためにどんなによかったか。

だがかれらのある者は信仰するが、

大部分の者はアッラーの掟に背くものたちである。

(聖クルアーン 第3章 110 節)

あなたがた信仰する者よ、

アッラーを畏れ自分の義務を果してかれに近づくよう念願し、

かれの道のために奮闘努力しなさい。

あなたがたは恐らく成功するであろう。

(聖クルアーン 第5章 35 節)

人びとは、「わたしたちは信じます。」と言いさえすれば、

試みられることはなく、放って置かれると考えるのか。

(聖クルアーン 第29章 2 節)

信仰のために奮闘努力する者は、

自分自身のために奮闘努力しているのである。

アッラーは、すべてのものに、何一つ求めない。

(聖クルアーン 第 29 章 6 節)

アッラーの道のために努力することのもう一つの面は、圧迫されてムスリムとしての生活ができないような土地から、それが可能である所へ移り住むことです。

迫害されて、アッラーの(道の)ために移住する者には、

われは現世で必ず良い住まいを与える。

だが来世での報奨こそもっと大なるものである。

これがもしかれら(不信者)に分るならば。

(聖クルアーン 第 16 章 41 節)

とはいえ、迫害者や侵略者に対抗して武器をとる必要が生じる場合もあります。ムスリムは侵略行為を固く禁じられていますが、ムスリムに対して攻撃や迫害をする者に対して身を守ること
は、アッラーに命じられています。

あなたがたに戦いを挑む者があれば、

アッラーの道のために戦え。

だが侵略的であってはならない。

本当にアッラーは、侵略者を愛さない。

(聖クルアーン 第 2 章 190 節)

戦いをし向ける者に対し(戦闘を)許される。

それはかれらが悪を行なうためである。

アッラーは、かれら(信者)を力強く援助なされる。

(かれらは)ただ「わたしたちの主はアッラーです。」と言っただけで、正当な理由もなく、その家から追われた者たちである。

アッラーがもし、或る人びとを外の者により

抑制されることがなかったならば、

修道院も、キリスト教会も、ユダヤ教堂も、

またアッラーの御名が常に唱念されているマスジド(モスク)も、

きっと打ち壊されたであろう。

アッラーは、かれに協力する者を助けられる。

本当にアッラーは、強大で偉力ならびなき方であられる。

(聖クルアーン 第 22 章 39－40 節)

9. 結論

イスラームの道徳律は、他人との関係における義務と権利であると言えます。ここでは義務の面を強調してきましたが、他人への義務は当然相手の権利と見なすことができます。したがって「子供に対する親の義務」は「親に対する子供の権利」と言いかえることもできるわけです。

しかし、ここで強調しなくてはならないのは、イスラームで言う個人の権利と義務はアッラーから与えられたもので、人間の作った道徳理念によるものではないということです。イスラームで説いている態度と行為には、他の道徳律と共通のものが多いのですが、その精神においては異なっています。

たとえば、商業活動において公正と正直を求めることは、べつだん変ったことではありません。ただ、それらがアッラーに対する義務であることを強調することによって、イスラームは商業道徳を精神的原理へと高めているのです。ムスリムが正直で公正であるとき、かれは健全な商取引での利益を得るばかりでなく、アッラーの命に従うという精神的恩恵をも得るのです。逆に、相手をだますとき、かれは同胞を裏切るだけではなく、アッラーに背くことにもなるのです。

要するに、イスラームの道徳は他人との関係において義務と権利を明示しており、その義務は同時にアッラーに対する義務でもあることを強調しているのです。この教えは、正直、親切、正義、慈善その他における根本的態度を示しており、その基本原理は 20 世紀の今日でも、7 世紀のアラビアと全く同じように通用するもののなのです。

…それであなたは、アッラーの慣行には代替がないことが分るであろう。また変更も決してないことも分るであろう。

(聖クルアーン 第 35 章 43 節)

(M・A・K)